宿禰にあやかっての命名．家族ぐるみの信仰だが，祖母の死後は遠去かる傾向．農芸高校を一番で卒業後，都庁へ就職．26歳結婚．現在，妻，娘との3人暮らし．

現症歴：幼小時から睡眠中の自動症が見られた．9歳で某病院でてんかんとの診断を受け，服薬を開始する．その後発作頻度は減少したが，完全消失はしなかった．25歳頃から，時に自動症を伴う自律神経発作が昼間にも起こる様になった．この頃CTに異常はない．以後，発作は頻発傾向，発作後もうろう状態も時々起こる様になった．

昭和59年3月2日から6日まで職場の同僚とスキー旅行．宴席でかなりの飲酒．この期間発作はない．帰宅後はしかし夜間の自動症の頻発傾向が著しかった．11日夜は浅眠．12日から13日にかけて，もうろう状態となる．13日明け方には神の声としての幻聴があった．15日昼頃から再びもうろう状態，それに続いて午後から躁性気分変調が基盤の武内宿禰の憑依状態を中心とした精神病状態となる．16日から27日まで当科関連病院へ入院し，27日当科転院となった．憑依体験は17日消失．躁状態がおさまるにつれ15日以後消失していた発作が始まった．

以上の症例について，側頭葉てんかんの挿間性精神病と，精神運動発作重積症との関道について脳波所見を混じえて考察を加えた．

8．経尿道的切除術の麻酔—東京女子医科大学病院における22例の検討—

（麻酔科）○椎名　恭子・川真田美和子・古谷　幸雄・藤田　昌雄

経尿道的切除術（TUR）は，灌流液の血管内吸収，腹腔内への穿孔など，麻酔管理上種々の問題を含んでいる．また，その対象となる疾患は，高年齢に多く，循環系，呼吸器系など種々の合併疾患の存在が，麻酔管理をいっそう複雑なものにしている．

麻酔法は，術中合併症を早期に発現することが可能な，硬膜外麻酔と脊椎麻酔を中心に行なっており，とくに前者は，術後疼痛対策にも，大変効果をあげている．

今回，昭和58年度に施行されたTUR 22例について，麻酔管理を中心に検討したので術中合併症例を含めて報告した．

9．ループス腎炎の予後に対する血漿交換療法の有用性について

（腎内科）
○塚田津夏子・佐中　孜・湯村　和子・雨宮　秀博・詫摩　武英・杉野　信博

ループス腎炎に対する血漿交換療法の効果を，腎機能及び生検標本などの面から検討した．対象は，1974年5月より1983年4月まで当内科に於て腎生検を行ない，6カ月以上経過した21人の患者で，治療によって血漿交換療法を施行した群，ステロイド単独療法の群，免疫抑制剤を併用した群に分けた．また，腎生検でみられる慢性病変を，慢性化指数（CI）として半定量化し，さらにCI高値例，中間例，低値例に分け，各治療群別にCcrと蛋白尿の推移を調査した．その結果，血漿交換療法を行なった6例中5例は，Ccr低下，CI高値，ネフローゼ症候群を呈していたが，そのうち3例で，治療後1年以内に，有意なCcrの上昇，尿蛋白の減少を認めた．これに対し，ステロイド単独療法を施行した11例中1例で，Ccr低下，CI高値を認めたが，有意なCcrの改善は得られなかった．以上より，Ccr低下，CI高値例には，血漿交換療法を試みる価値があると思われた．

10．脾摘後，大網内脾自家移植4例の経験（脾自家移植　第1報）

（第2外科）
○久米川和子・樋口　良平・小野田万丈・金本　哲大・中川　隆雄・木村　恒人・鈴木　忠・倉光　秀麿・織畑　秀夫

脾摘後，感染防御機能に及ぼす影響の大きい事より，脾摘の是非が問題にされていきている．修復の不可能な脾破裂例では，脾摘が必要となるが，脾機能を温存する為，脾自家移植を付加する方法がある．我々は，4例に大網内脾自家移植を行ない，その生着を確認したので，若干の考察を加えて報告する．

移植方法は，Kusminskyらの報告に準じ，摘出脾の2～3mmの薄片を，折りたたんだ大網で作ったポケットに縫着するもので，手技は簡単で，時間がかからない．術後の生着状態は，脾シンチスキャン，CTスキャンにより又，再手術の機会を得た症例では，移植脾の生検により組織学的に検討した．さらに，術後の免疫能は，免疫グロブリン，その他，免疫学的パラメータで経時的測定をした．

外傷性脾破裂2例，肝硬変症に伴う脾機能亢進症2例の4例に，脾自家移植を施行し，1年～6カ月の経過をみたが，臨床的に感染症や，移植による合併症を認めなかった．

移植脾の総合機能を大まかにみる指標として，放射性コロイドによるシンチスキャンを施行したが，移植